
3 年前

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3年前

【Nコード】

N4258S

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

「花の島の秘密」の登場人物、北守ヨウスケと町田アナンの出会いの話です。*ブログで完結後、なろうへ掲載してます。

3年前1

飲み会の場所に行くと鈴木と二人の男、木村と松本が居酒屋の隅の座敷に座っていた。座敷に置かれた正方形のテーブルの上には食べ物やビールの入ったジョッキや焼酎の入ったコップが所狭しと置かれていた。

「遅いぞ。北守。」

酒で顔を真っ赤にして鈴木が俺を呼んだ。

「悪い、待たせたな」

俺はそう返事をして座敷に上がった。

「北守、何飲む？」

「ああ、俺はビールで。」

「店員さん！」

鈴木は腰を上げるとキッチンのある方向に向いてそう叫んだ。しばらくして店員がやってきて、鈴木は生ビールを頼んだ。

「で、今日はなんで遅れたんだ？デートでもあったのか？」

「まあな」

俺がそう言つと鈴木はにやつと笑った。

「お前はいつもそうだよな」

俺は鈴木 of 嫌味な笑みから顔を逸らすビールの入ったジョッキを煽った。

今日の女のサンプルも手に入れた。これで500個のサンプルだ。この中にヒトシの運命の女がいるだろう。

卒業まであとわずかだ。

できるかぎり集めて島に帰りたい。

「アナン」。もうやめなよ」

ふいに座敷の仕切りをはさんで数人の女達が飲んでるのか、そんな声が耳に入った。

「いーや、まだ飲み足りないわ。止めないで！」

「モモ力。飲ませてあげなよ。お酒を飲んで忘れるのが一番よ」

「リエ！」

かわいらしい女の声が聞こえ、鈴木と他の二人の顔に笑みが浮かぶのかわかった。

「男だけで飲むのはつまないよな」

「そうだよな」

「よっし！俺がまずは先発て様子を見にいきます！」

鈴木の友人で小柄だがそれなりの顔の男・松田がそう言って立ち上がった。顔が赤いところを見ると俺が来るまでに結構飲んでいたようだった。

「期待してるぜ、松田」

優しい顔が印象的な木村がぼんと松田の足を叩いた。

めんどうだが、まあ、女のサンプルを集められるからいいか。

「やほう！俺達と一緒に飲まない？実は隣にいるんだけど」

陽気な声が仕切り越しに聞こえた。木村と鈴木が松田の挑戦に耳を傾けている。

「えー！？隣ですか？変な話してなかったわよね！私達！」

女の中で一番かわいらしい声をしていた女がそう言った。

「大丈夫。なーにも聞いてなかったし、俺ら今来たばかりだからさ。ねえ。一緒にどう？」

松本の声に俺は松本がその童顔を使って女達を口説いているのが想像できた。大概の女はそれで落ちた。

「隣い？本当なの？」

かなり酒が入った女の声が聞こえた。そしてふいに仕切りが取り払われた。

「あ！本当だわ！」

急に視界が広がった。女は持っていた仕切りを座敷の壁際に勝手に置くと俺の隣に座った。

「私ここがいい！」

「ア…アナン！」

女の一人が慌ててアナンと呼ばれた女を立ち上がらせようとした。

「ま、いいじゃん。一緒に飲もうよ」

鈴木と木村は女の行動に一瞬驚いた顔を笑顔に変えると酔っ払いを立ち上がらせようとしている女に言った。

「でも…」

「そうそう。アナンちゃんだっけ？その子、北守が気に入ったみたいだし。ね？俺達と飲もうよ」

松田がダメ押しのような笑顔を向けると他の女達が顔を見合わせるとうなずいた。

「じゃ、すみません…私達も一緒に」

「うんうん、そうしなよ」

そうして俺達8人は飲み始めた。

俺が担当することになった女は町田アナンという名前だった。何でも3日前に男に振られたらしい。女の子らしい顔だったが化粧が地味で服装も垢抜けない感じで他の3人くらべるといまいちな印象だった。しかし町田の顔が誰かの顔に似ていて俺の記憶を刺激した。

「はい、飲んで！」

町田はかなり飲んでいた。しかしまだ飲むらしく焼酎瓶を抱えて、俺にコップを差し出した。

「それ以上はやめたほうがいいと思うけど」

「うるさいわね！私の酒が飲めないの？」

町田はそう言う俺が持ったコップに焼酎を注いだ。そして自分のコップに注ぐと飲み干した。

こいつ、強すぎ…

焼酎を気で飲む女を俺は知らなかった。しかも一気飲み。

俺が啞然として町田を見ていると町田は急に泣き出した。

「ジユンくんは本当にいい人だったわ。この本だってジユンくんが私の誕生日に」

町田はそう言つて鞆から本を出して俺に渡した。

「ねえ。見て。いい本でしょ？」

泣きながら町田はそう言つた。渡された本を見ると「12月3日の誕生日生まれの人へ」という何にもひねりのないタイトルが表紙に書かれていた。開いてみると内容も誕生石のことや、12月3日起きたことなどが書いてあるだけだった。

「ねえ。私の何がいけなかったの？顔？それともスタイル？」

町田は酒臭い息を俺に吐きながら近づいた。町田の顔が間近になる。涙に濡れた顔はともきれいな顔とは言えなかったがやはり誰かに似ていた。

遠い昔にあつたことがある人だ。

思い出そうとしても思い出せなかった。

「そつだ！ねえ、いいところ連れていつてあげるわ」

町田は突然思い立ったようにそう言つと俺の腕を掴んだ。

席を立つた俺達を鈴木たちが見るのがわかった。

「モモ力、リエ、ミカコ、そして男子諸君！私はこの人と先に失礼するね。バイバイ」

町田が強引に俺の腕を引いて座敷を降りた。

「おい、お前、荷物は！」

完全の酔っぱらいの町田は千鳥足で俺を連れて店を出ようとしていた。

「すみません。これアナンの荷物です。よろしくお願いします」

町田に引きづられるようにしている俺に女が町田の鞆を持たせる。

俺はため息をついたが町田の鞆を持ち、腕を引かれるまま店を出た。なんで俺が

そう思ったが町田の顔にみた誰かを思い出たくてそのまま一緒に行くことにした。

3年前2

「ねえ。きれいでしょ」

町田が連れてきた場所は少し高い所にある公園だった。明かりが少ないためか星がよく見えた。

島に戻ればもつときれいな星が見えるんだが

俺はそう思いながらも適当に相槌を打った。

町田はかなり酔っている感じでふやけた笑顔を浮かべて空を見ていた。

「あ、流れ星！」

「本当か？」

町田の指差す方向を見たが瞬く星以外に何も見えなかった。

「嘘だよ〜ん。だまされた？あんた結構素直な人なのね。」

町田はふふつと笑った。

この酔っぱらいかが

俺はあきれて笑った。

「この場所ね。ジュンくんに連れてきてもらったの。一緒に星をみて流れ星が流れて誓ったのに。なんでかな。ねえ。私ってそんなにだめな女なの？かわいくないから？胸が大きくないから？なんでジュンくんは私を捨てたの？なんで？」

そして今度は泣きだした。

まったく酔っぱらいって生き物は忙しい。

俺はため息をつくと町田を引き寄せた。そしてハンカチを出してその顔を拭いてやった。

町田の瞳が俺を見つめた。俺はその濡れた瞳に誘われるようにして町田の髪を撫でるとその唇を塞いだ。

「んっ」

町田が甘い声をだした。そして俺の背中に手を回す。

酔っ払いと寝る趣味はないんだが：

町田から離れようとしたが、その瞳がすぐるように俺を見た。俺はその瞳から逃れられなかった。俺は町田の頬を両手で包むと深く口づけた。

俺と町田はそのまま近くのホテルになだれこんだ。酔いのためかそう望んだのか町田は抵抗する様子もなく、俺の体にその体を預けた。俺は町田の顔が誰に似てるのか、そんなことを行為の中どうでもよくなった。

遺伝子情報を得るために女に近づき、結果的に女と寝ることになることが多かった。

もう何人と寝たのか覚えてないくらいだった。

町田アナンもその一人にすぎない

無邪気な顔をして寝る町田に掛け布団をかけ、俺はシャワーを浴びるためにベッドから腰を上げた。ふいに脱ぎ捨てたジーンズから音が聞こえた。それは携帯がメールを受信した音だった。

シャツを羽織りながら携帯を取り出すとそれはヒトシの父マサシからだった。

メールを開くと『22歳！誕生日おめでとう！島に帰ってくるのを楽しみにしてる。ヒトシ』

と書かれていた。

そうか、誕生日か。

すっかり忘れていた。

『ヒトシへ ありがとう。俺も島に帰るのを楽しみにしている』と

俺はメールを返した。

ヒトシのために俺は運命の女を探している。

俺はシャワーを浴びると体を拭き、床に脱ぎ捨てた服を着た。
ベッドの上の町田はまだすやすやと寝ているようだ。

サンプルを集めるために抱いた。
それ以外に意図はない。

俺は枕についた長い髪の毛を拾うと、町田の鞆から本を出して挟んだ。

元彼から貰った本なんてあるだけ邪魔だろうと思った。

顔をぐちゃぐちゃにして泣いていた町田。

この本はない方がいいはずだ。

俺はそう決めると携帯とその本を抱え、部屋を出た。そして俺はその本を自分の本棚に仕舞い込んだ。

それから町田と二度と会うことはなかった。

元から大学なんてまともに行ってなかったから同じ大学ということが驚きだった。

しかし運命のいたずらか、町田はヒトシの運命の女だった。3年後に開かれたその本に挟まっていた町田の髪の毛が決め手だった。

そして俺は町田と再会することになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4258s/>

3年前

2011年7月13日16時44分発行